

# スゴウデ 凄腕 つとめにん

## 一日に縫う学生用シャツ

### 最大1500枚

菅公学生服米子工場 縫製技術者

結城 伸子さん(53)

三つ折りにしたカッターシャツの裾を、ミシンの先端に差し込んでいく。右手で折り込みを続けながら、左手で裾を流して、裾の曲線をよどみなく縫い進めていく。

「カンコー」ブランドで知られる菅公学生服は、中高生の制服や体操服のトップメーカー。その米子工場で、シャツやブラウス、セーラー服の縫製を手がける。

多くの作業が機械化されるいまも、シャツの工程は手作業が欠かせない。同社に約1600人いる職人のなかでも、学生向けシャツを1日1500枚という普通の職人の倍近いスピードで縫っている「記録保持者」だ。

35年前、米子の高校を卒業したら、大阪に出て洋服の販売員か美容師になろうと思っていた。ところが、国鉄マンだった父が「都会暮らしは心配」と猛反対。強引に米子工場を受けさせられ、入社することになった。当時の社名は尾崎商事。「商社の事務職だと思って出社したら縫い仕事だった。何も知らなかったのが驚きました」

入社した直後の研修のこと。当時足踏み式でスピードを調整していたミシンを「ためらわず踏み込む度胸がある」と見込まれた。シャツの縫製現場に配属されたものの、流れ作業の中、目の前にシャツの山がどんどんできていく。縫い目に波ができるなど仕上がりが雑で、社内で「めげ」と呼ばれる不良品もたくさん出した。

スピードについていけないのが悔しく、休憩の間も「めげ」の糸を自分でほどいては縫い直し、特訓した。負け

ず嫌いな性分で没頭していたら、ミシンの針で自分の指を縫った。それも1週間に2度。あれほど熱心に米子工場を勧めてくれた父から「器用だと思って入れたが、俺の見込み違い。辞めてもいいぞ」とあきれられた。

そんな日々が報われ、先輩たちから目をかけてもらうようになった。指導を踏まえ、ミシンの扱い、布の裁き方、針を通すタイミングなどを常に考えながらやっているうち、工場の見学に訪れる人々を引率する会社のガイド役が、「うちの職人はすごいでしょう」と紹介してくれるまでになった。

毎日使うミシンは、部品も消耗品が多い。縫うときに布が外れないようにする「押さえ」という部品を交換するとき、結城さんが必ず行う「儀式」がある。新品に変えたときは必ず、1カ月で約4千回、試し縫いをする。わずかな溝ができて、布が流れる「道」ができる。同僚は「部品一つ一つに職人の魂がこもっている」と評する。

入社以来、大半をミシン台の前で過ごしてきたが、一時、生産管理やデザイン企画を担当する部署に配属されていた。いまは約250人が働く米子工場で縫製現場の指導役として、5千種類もある製品の生産工程全般にも目配りする。中国など海外4カ国の工場にも指導に出かける。

社名は「学問の神線」として知られる菅原道真にちなんでいる。「子どもたちと大切な時間を一緒に過ごす制服をつくる仕事。やりがいを持って仕事する後輩をできるだけ多く育てたい」。技の伝承にも余念がない。(豊岡亮)

大胆でも道具一つまで魂込め



ミシンを使わせたら社内きっての腕前。だが、職人気質というより親分肌で、男女問わず慕われ、悩みや恋愛相談にも気さくに応じる＝鳥取県米子市

スゴウデ 凄腕のひみツ

### すり減った千枚通し

道具を大切に使うことから仕事は始まる。布に穴を開ける愛用の千枚通し(左)の針は3.5センチ、新品(右)に比べ半分以下にすり減ったが、まだまだ現役だ。現在2代目。



### 仲よし4姉妹

4人姉妹の次女。月に1、2回は、姉妹の誰かの家に全員集まり、姉妹で「女子会」を開く。時間が経つのも忘れておしゃべりするの、何よりの息抜き。大好きな韓流ドラマや、次男(29)夫婦に授かった孫娘(4)の話題などで盛り上がる。「何よりも、4人で笑うのが仕事の活力です」。妹の娘2人も同じ工場働いている。

### プロフィール

ゆうき・のぶこ 1961年、鳥取県江津市生まれ。79年に菅公学生服米子工場に入社。以来約30年、シャツ縫製一筋で腕を磨いた。生産課係長を務める。生産管理にも通じる。

■情報・ご意見はファクス(03・3541・0661)またはメールで(yukan-toukou@asahi.com)

スボ いる 柿 な とく ち。 「それ 道修 った 一普 田は 如理 れる あれ など 手格

本来 市は 言 合 とい スポ さんか ため いた 合 した の機 ない 「武 柿